

## 保育養成における栽培活動の必要性の検討

－学生と保育者における栽培活動の実態と意識調査から－

Necessity of Natural Environment Education for Early Childhood

－ Awareness Survey of Cultivation Activity for the Student and Nursery Workers －

黒田 和子\*<sup>1</sup>

Kazuko KURODA

### 要旨

本稿では、幼児教育における領域「環境」を教育内容に資する「栽培活動」を取り上げ、幼児保育学科の学生が保育者としての学びを拡充する際に、「栽培活動」は学生の意識のなかで如何に存在しているのか。「栽培活動」への意識の実態を追究した。さらに学生たちが、これまでに経験してきた「栽培活動」に焦点をあて、学生自らが「栽培活動」との関係はどうとらえているのかに着目しながら、保育者が適切な「栽培活動」を子どもに準備構成していくための意識のプロセスを解明しようと試みた。「栽培活動」は自然と人をつなぐ存在であった。その自然に対してつながりを好む学生が著しかった。リフレッシュなどの気もちの切りかえとして自然が存在していた。これに対し、汗をかくことや虫にさされるなど身体的な不快をともなう嫌悪感を嫌う学生の存在が多くあった。いわば、学生にとって自然は内的な心の調節道具である。そうした自然を意識づける「栽培活動」の恩恵は、水や空気などと一緒なのである。日々当たり前のように存在し、喪ってはじめて気づかれる恩恵のようだ。そのため、「栽培活動」の意義を感じても、あえて整備してまで「栽培活動」するものではないという意識の存在が明らかになった。また、これまでの経験から「土に植え」、「水を与える世話」をすれば植物の生長を保育に取り入れることができるという気もちをもっており、保育者が必要とする「栽培活動」における下準備について明確な答えをもっていないことも明らかになった。

【キーワード】 栽培活動      自然環境      幼児教育      畑      保育者

### I. はじめに

#### 【問題の関心と研究の視点】

自然環境は、乳幼児期の子どもにとって、発達を支える重要な柱となっている。幼稚園教育要領解説の第3節 環境の構成と保育の展開において「天気の良い日は戸外で過ごす、風のある日であれば風を感じながら遊ぶなど、季節の変化や自然事象と深く関わる幼児の生活を大切にして、自然な生活の流れの中で幼児が様々な自然環境に触れることができるようにすること」<sup>1)</sup>と明示されており、保育者が自然環境を創り出す必要性を謳っている。幼稚園教育要領の第1章総則の「幼稚園教育の基本」の中に、幼児期における教育は幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものである<sup>2)</sup>ことが明記され、保育所保育指針や幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても、環境を通して保育・教育を行うものと規定され、各園には自然と関わりながら学んでいくことが求められ、その一環として「栽培活動」が取り入れられている。こうした幼児教育の内容に繰り返し登場する自然環境は、幼児教育の実践の質の向上に「栽培活動」のあり方が深く関わっていることを認識させると同時に、その活動が栽培園の有地だけでは果たし得ないことを示している。保育者が、子どもに対して与えられる最も身近な自然である「栽培活動」は、保育者の力量や「栽培活動」へのモチベーションの形成が課題となるのであろう。

幼児教育における「栽培活動」は、2005年6月（2015年改訂）の食育基本法<sup>3)</sup>を受けて、当時さらに積極性を増したといわれ<sup>4)</sup>、教育的意義については「植物の生長をみるのみでなく、人間の暮らしが自然の恩恵の下にあることを知るためのもの」<sup>5)</sup>や『「人格の発達を促す」総合的な営みとして、人間と自然との関係を感じて捉え、豊かな感情体験に裏打ちされた思考を育む』<sup>6)</sup>という理論的系譜や実践の分析が進められてきた。一方で、「栽培活動」を教育の「営み」として捉えるならば、学生たちが幼児期以前からの教育

\*1 松本短期大学 幼児保育学科

実践においても営為は存在していたと考えられる。たとえば、1890（明治23）年頒布幼稚園においても、現行保育内容「環境」領域に該当する内容で、草花や野菜を収穫していた<sup>7)</sup>し、これから幼稚園を創ろうとする人たちのために書かれた「幼稚園創立法」（明治11年12月発行）では「草木般ノ種ヲ播キ苗ヲ植エ土ヲ鋤キ水ヲ灌キ自ラ以テ培養セシムヘシ」<sup>8)</sup>や、平成15年松本短大幼稚園の記念誌にも「園庭の畑でみたじゃがいもの花（中略）先生とお友だちと一緒に見てその感動はさらに強いものになった」<sup>9)</sup>という記述があり、そうした時代の実践者の中にも「栽培活動」における教育効果の概念があったはずである。

学生たちが「栽培活動」の思い出を想起し、「栽培活動」をした過程を明らかにすることができれば、学生たちが「栽培活動」を必要とする理由や、その技量向上に対する意識や取り組みに迫ることができるのではないだろうか。

それを見るのに有効であると思われるのが学生に対する栽培意識アンケート調査である。とりわけ、「栽培活動におけるこれまでの経験に基づく「意識」は、アンケートに答えることによって学生たちにも自己を再認識させるものである。教育内容の質の向上をめざした実践の中には、過去に行った栽培経験・体験を適用しようとするだけでなく、実際に「栽培活動」を行って保育者としての力量や技量向上につなげているもある。こうした「栽培活動」が、よりよき保育者育成を形成した過程をみれば、学生たちに対して「栽培活動」をどのように認識させていけばよいのか明らかにできると思われる。

## Ⅱ. 先行研究の検討

保育者養成における「栽培活動」のあり方を扱ったこれまでの研究は、「栽培活動」を展開して学生たちの実態や実践力に関する多くの知見を蓄積してきたが、学生のこれまでの経験から思想や意識を言及したものは少ない。「幼児教育に用いる栽培植物に必要な生育特性について」注目した平尾健二の研究<sup>10)</sup>や鈴木里美による「小麦栽培活動を通して学ぶ自然と共生した食農保育の実践について」の研究<sup>11)</sup>は、「栽培活動」の実践における教育効果の測定や体験を通して保育者としての多くの知見を得る方法として注目されるが、いずれも「栽培活動」を対象としている。この背景には、食育基本法や環境教育ECEfS（Early Childhood Education for Sustainability）の影響がある。また、「環境教育を実践できる保育者養成のあり方」に注目した地下まゆみ・井上美智子の研究<sup>12)</sup>は、「栽培活動」を積極的に保育者養成に取り込み、教育効果の測定や効果に言及したものとして注目されている。とくに八幡ら（2023）<sup>13)</sup>による「学生の栽培活動の考え方や取り組みについての実態調査の研究」では、「栽培活動」が、土づくりからの準備段階から片付けまでの一連の活動として視野を広げられるような教育方法の重要性を提案している。いずれも学生の意識を対象としている。しかしながら、これまでの経験と今の状況における「栽培活動」の意識のあり方は、ほとんど解明されていない。これまで、見過されてきた学生が幼少時期の彼らの「栽培活動」の実態を把握する研究を蓄積することは、幼児教育における領域「環境」及び幼児教育の方法論における学生の学びを豊かにするものであろう。さらに現在「栽培活動」を行っている保育者の実態を把握することで学生の未来も見えてくることであろう。

## Ⅲ. 研究の目的

上記のような問題関心の下で、本稿では保育者養成における「栽培活動」の実態とその意義に注目する。学生や保育者に「栽培活動」の実態とその意義について、アンケート調査及びインタビュー調査・レポート記述内容検討によって明らかにし、最終的には、多様な経験を保障する保育者育成を期待する。領域「環境」及び幼児教育の方法論に関する研究のひとつとして位置づけるものである。

## Ⅳ. 研究方法

### 【分析1】「栽培活動」の必要性とその効果に関するアンケート調査

対象：a 短期大学に在籍する幼児保育学科の全学生

期間：2023年7月（計1回）

方法：自己記入式のアンケート用紙を用いて「栽培活動」の効果について調査する。

### 【分析2】現役保育者の「栽培活動」意識調査 インタビュー（質的研究）

調査協力者：a 幼稚園に勤務する教諭

調査日：倫理認可後2023年8月（計1回）

調査方法：質的研究。「栽培活動」での留意点や工夫点。「栽培活動」への可能性について調査する。

## 【分析 3】観察記録（質的研究）

対象：a 短期大学のゼミナール活動で「栽培活動」をしている学生 19 名より抽出

期間：2023 年 5 月～2023 年 9 月

調査方法：「栽培活動」後のレポートにより「栽培活動」における意識変化調査をする。

## （4）倫理面への配慮

調査は協力者の同意に基づいて行った。本研究は松本短期大学の研究倫理審査を受審し、承認された（承認番号 202304）。

## V. 結果の集計方法

本稿では、学生の「栽培活動」への意識をよりよく理解するために、既に先行研究の事例として取り上げられている八幡ら（2023）<sup>13)</sup>の質問内容に加えて、「栽培活動」の経験やその時の感じ方を取り入れた。すなわち、これまでの成育歴の栽培経験の影響を受けていることを踏まえ、より頑健な検討を行うことをめざしている。

【分析 1】では、「栽培活動」の必要性とその効果に関するアンケート調査の量的データは、統計の累計をして Excel ソフトを用いた。アンケート項目の単純集計数値については単純計算、自由記述については、テキストマイニングの手法を用いて比較検討する。テキストマイニングとは、大量の文書データから、有効な情報を取り出すことを総称して言い、文書を単語（名詞、動詞、形容詞等）に分割し、それらの出現頻度の情報を抽出するものである。本研究では、KH-Coder を使いテキストマイニングの結果集計を行うこととした。これにより、学生の「栽培活動」における実態と意識を把握する。

【分析 2】では、【分析 1】を踏まえて、保育者へのインタビュー（意識調査）では、「栽培活動」をしている保育者の意識と学生の意識を照らし合わせるため対象者を保育者にして対象範囲を広げた。インタビューは質問項目に基づき、半構造化面接法で行った。

【分析 3】では、現在「栽培活動」を行っている学生への意識の変化を検証した。「栽培活動」後のレポート内容を検討した。

なお、八幡ら<sup>13)</sup>の先行研究をふまえると、【分析 1】については、以下の予想が立つ。自然に対する学生の意識は好意的である。しかしながら、好意的に捉える要因は、これまでの成育歴の栽培経験が影響を及ぼしている可能性がある。また、保育者が適切な自然環境・栽培環境を準備すれば、子どもの「栽培活動」に対する意識が高めると感じている学生が多い。そのため【分析 2】では、保育者による「栽培活動」を保育に取り入れる文脈に着目し、【分析 3】では、実際に「栽培活動」を行っている学生の意識の変化をふくめた検討を行うこととした。

## VI. 結果

## 1. 【分析 1】「栽培活動」の必要性とその効果、学生に関するアンケート調査

a 短期大学に在籍する幼児保育学科の学生から 144 名分の回答を得た。1 年生は 63 名、2 年生は 81 名であった。対象者の一覧は表 1 に示す。対象の減少は、実習の前倒しの学生などの欠席と季節の変わり目で体調不調による欠席による。

次に対象者の特徴として、表 2 志望資格は、99% が保育職の資格を目指していると回答している。さらに、その大半が保育士と幼稚園教諭の両方の資格を目指している。

表 3 進路希望は、8 割が幼児教育施設での就職を希望し、幼児教育の過程を学んでいることがわかる。

表 1 対象者

項 目	1 年生 (人)	2 年生 (人)	合計 (人)
分析人数	63	81	144

表 2 対象学生の志望資格 n=144

項目	1 年	2 年	合計
保育士	7	7	14
幼稚園教諭		1	1
両方の資格	56	70	126
その他		3	3
総数	63	81	144

表 3 対象学生の進路希望 n=144

項目	1 年	2 年	合計
保育園 (認定こども園含)	49	51	100
幼稚園	9	15	24
施設職員	4	12	16
その他	1	3	4
総数	63	81	144

## 1 - (1) 自然活動に対する意識調査

「自然活動について」の結果からは、表4が示すように144名のうち120名が好意的にとらえていることがわかった。すなわち、予想通り、自然は私たちの生活から切り離せないものである。自然活動のうち、「自然活動のよいところ」を尋ねると、図1に示すように「リフレッシュできる」76%、「空気がおいしい」49%「太陽の日差しが好き」25%が大半を占めた。目に見える形の事物や行動ではなく、本能的な部分におけるリラックスして心を調節する一因になることが述べられている。

一方、「自然活動でマイナスなところ」については、図2に示すように「虫さされ」78%、「汗をかきたくない」38%が大半を占めた。労力や目にみえる嫌悪感ではなく、個々人が感じる不快感に起因するものが上位を占めていることがわかった。

表4 自然活動について n=144

項目	1年	2年	合計
好き	45	75	120
いいえ	3	2	5
どちらとも いえない	15	4	19
総数	63	81	144

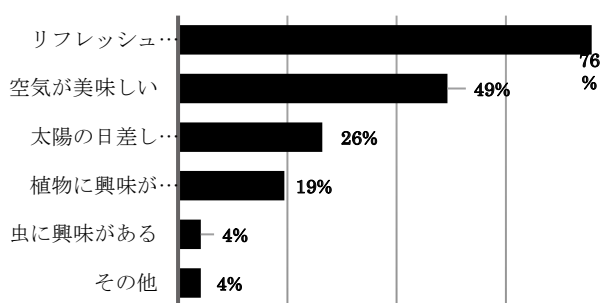


図1 自然活動のよいところ

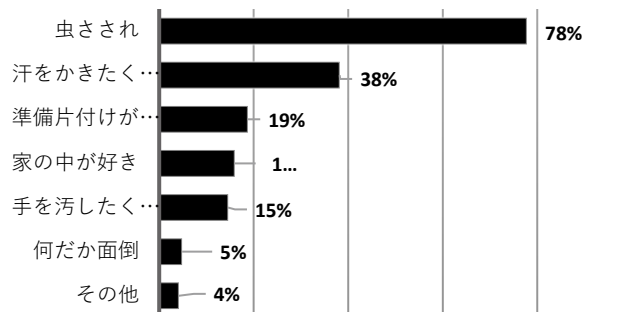


図2 自然活動のマイナスなところ

## 1 - (2) これまでの栽培経験に対する調査

「栽培活動」の経験についての結果からは、表5が示すように144名のうち143名がこれまでに「栽培活動」を経験していることがわかった。「栽培活動」は図3より、小学校(88%)、幼稚園・保育園(67%)と、幼少期に多く。学年が上がるにつれて「栽培活動」をしなくなっている。また、栽培場所は図4より、園や学校の畑や庭が大半を占めている。教育的活動の下で「栽培活動」をしてきたことがうかがわれる。そのため、図5が示すように「栽培した植物」も教育現場で活用の多いトマト(83%)さつまいも(65%)である。また、「栽培活動」経験では、草むしり(58%)その他(土づくりなど)(7%)の経験が少ない。これも、教育現場で栽培時間を有効に使ったためであろう。つまり、収穫や苗(種)植えのような活動後すぐに教育的展開になりやすいことに栽培時間をかけたことがうかがえる。

表5 栽培活動経験はありますか

項目	1年生	2年生	n=144
はい	63	80	143
いいえ		1	1
わからない (記憶にない)			0
総数	63	81	144

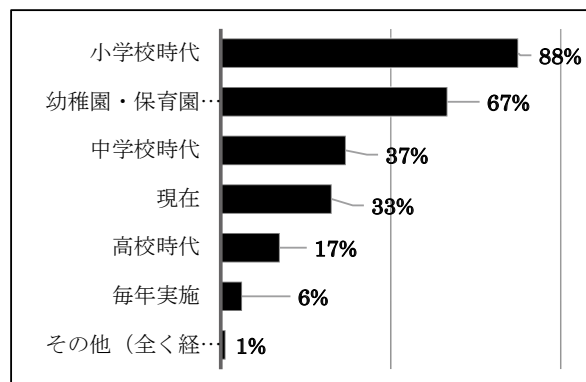


図3 栽培活動の経験時期

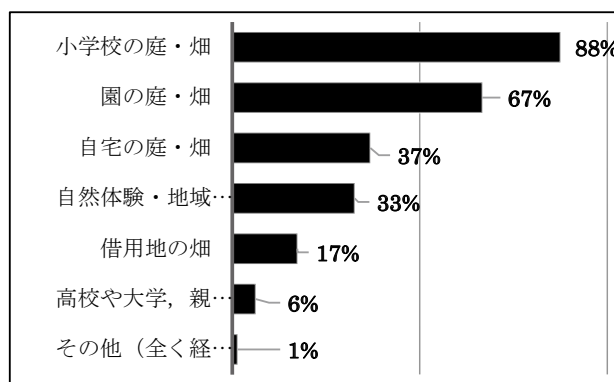


図4 栽培活動をした場所

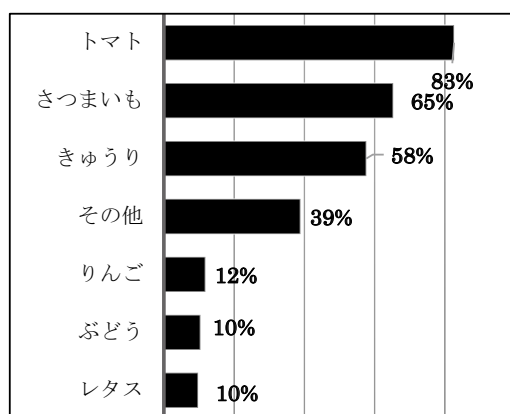


図5 栽培した植物

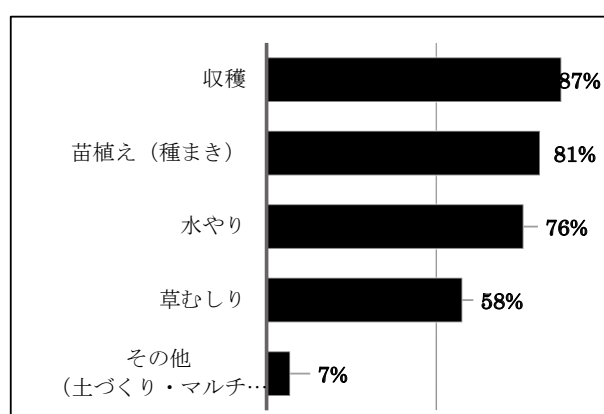


図6 栽培活動経験

## 1- (3) これまでの栽培経験が及ぼした効果についての調査

つぎに、「栽培活動」の実態として「栽培経験はなんらかの効果があったか」を調査した。表6で示すように、144名中90名に「効果があった」という回答であった。表6-1では、「効果があった」と回答した者の自由記述で得られた回答の中にどのような語が出現したか、また、それぞれの出現回数は何回であったのかを分析した。単語で抽出後を示しているため多様である。そのために上位語を取り出し、自由記述の具体的な内容を表6-2に示す。

表6 栽培経験はなんらかの効果があったか

項目	1年生	2年生	合計
あった	39	51	90
わからない	23	26	49
なかった	1	4	5
総数	63	81	144

表6-1 「栽培経験はなんらかの効果があったか」

の自由記述における使用する言葉の種類と頻度

抽出語	出現回数
育てる	32
知る	31
植物	25
食べもの	22
栽培	20
自分	19
野菜	15
大切	14
楽しい	13

表6-2 「栽培経験はなんらかの効果があったか」抽出上位語の自由記述

<p>【育てる】</p> <p>植物を育てることのむずかしさ。植物を育てることの楽しさを知った3。育てる楽しさや作ってくれる人への大変さがわかり感謝の気持ちが生まれた。植物を育てるまでにたくさんの時間がかかることや大変なことがたくさんあることを知り、より感謝をすることができた。</p> <p>植物を育てる大変さと、喜びを感じられた3。植物などを育てることにより命について学べた5。</p> <p>植物を一から育てることの楽しさを得られた。植物を育てる大変さと、大切さを知った。自分で育てることの大切さを知れた。</p> <p>育てることができる知識となり、自分で栽培活動に使用することができるようになった。植物を育てることで、育てた野菜への興味がわいた6。野菜を育てることに興味・関心を持った。食べものを育てる大変さを学び、大変な思いをしたことにより、より食べものが美味しいことを知ることができた。野菜や果物を育てることの大切さを知った。</p> <p>【知る】</p> <p>植物が育っていく過程を知ることができた。植物を育て収穫する楽しさを知った。食べものの栽培方法を知ることができた。</p> <p>手をかけるとちゃんと応えてくれることを知った。植物と交わることで命の大切さを知れた4。生長させるってむずかしいことを知った2。植物を育て自分で美味しく食べることの大切さを知った。それぞれの植物は、いつ頃に植えれば大きくなるのかを知ることができた。栽培する時期や方法を知った7。育てた食べものについて知ることができたり、どう育つのか知れて、食べものを大切にしようと思うようになった2。食べものの大切さを知ることができた5。</p> <p>【植物】</p> <p>種や苗を植えるところから栽培活動をしているが、日々の生長している植物をみると感動した。植物に対する知識が増えた。</p> <p>栽培活動をしたことにより、植物の始まりから収穫までの生長過程がよくわかり勉強になった。植物は種を蒔いて水やりをすれば勝手に育つと思っていた。植物が意外と手がかかっていることを知って、より感謝して食べるようになった。種蒔き、草むしり、水やりなどの栽培活動を通して、植物が大きくなる過程を楽しみに待つようになった。植物などの自然の大切さがわかった。</p> <p>少しずつ生長する植物への愛着が生まれた。植物や自然に触れた思い出が自分の経験になっていて、人生を豊かにしようと思う。</p>
--

## 1 - (4) 栽培経験から考えて、幼児にとって「栽培活動」の効果はあるかの調査

「栽培活動」の意識として「幼児にとって「栽培活動」は何らかの効果があるか」を調査した。表7で示すように、144名中130名が「効果がある」という回答であった。表7-1では、効果があったと回答した者の自由記述で得られた回答の中にどのような語が出現したか、また、それぞれの出現回数は何回であったのかを分析した。単語で抽出後を示しているため多様である。上位語を取り出し、自由記述の具体的な内容を表7-2に示す。

表7 幼児にとって栽培活動は何らかの効果があるか

項目	1年生	2年生	合計
ある	57	73	130
わからない	6	7	13
ない		1	1
総数	63	81	144

表7-1 「幼児にとって栽培活動は何らかの効果があるか」の自由記述における使用する言葉の種類と頻度

抽出語	出現回数
自然	40
大切	31
食べもの	29
育てる	25
植物	24
思う	22
知る	21
自分	19
楽しい	16

表7-2 「幼児にとって栽培活動は何らかの効果があるか」抽出上位語の自由記述

## 【自然】

自然とかかわる楽しさ。自然は楽しいと思う気持ちが育つ。自然のなかで生活している自覚が芽生える。栽培の大変さから、自然への意識の芽生え。自然と関わることで命を大事にできる2。命の大切さや自然と関わることで自発的な行動・好奇心が刺激されると思う8。小さな頃から自然に触れることで虫や植物に対して興味が出る。自然を知ることができ、学べる11。自然の良さが小さい頃から感じられる。どうやれば、野菜が美味しくなるのかを自然の中で学べる。自然に触れることで、目には見えないが得られるものがある。自然の活動が好きになる2。自然の中で植物の大切さや食べものの大切さを学べる。自然の楽しさを味わうことができ、いろいろな虫に出会うことができる2。食べることで自然に興味がわく。自然のしくみを知る機会になる土と植物のつながりを知ることができる。自然に触れることができ、食の大切さを知ることができる2。自然に自然と触れ合える環境ができるため。自然に触れるという大切なことを知れると思う。自然の中で栽培活動することでクラスを越えた関わりも生まれていると思うから。植物や自然に触れた思い出が自分の経験になったから人生を豊かにすると思うから。

## 【大切】

食べものの大切さがわかる6。育てる手間や命の大切さを知る。植物を大切にできるようになる。物を大切にすることが育つ。生命の大切さや尊さを理解する。植物の大切さ、モノをあつかうことの大切さがわかるようになると思う。自分の力で何かを育てる楽しさ、大切さを知り、苦手な食べものを食べられるようになるかもしれない。食べものの大切さがわかり、育てる大変さもわかる。生命の大切さや尊さに対する心が芽生えると思う。育つ過程を見て、食材を大切にしようという気持ちが育ち命の大切さを学べる。大切に育てることを学んだり体験したりすることが、子どもにとって1番記憶に残り、良い経験になると思う。生き物・植物の生長、発達の様子を見て、命の大切さを知ることができる2。命の大切さ、栽培の難しさ、大変さ、を知ることができる。食べものを育てる大変さを知り、大切にしようという気持ちがもてる3。

## 【食べもの】

日頃、自分が口にする食べものがどの様に育つのかを知ることにより、食べものに対する感謝が生まれると思う。食べものに対する意識がかわる。食べものや植物を育てることの楽しさがわかるのではないかと考える。食べものへの好き嫌いへの克服3。食べものを育てる、それを食べるという行為への感謝4。活動を通して、植物の生長を見たり、自分たちで手を加えたりするから、苦労を知って食べものを粗末にしなくなると思う2。自分が育てた食べものを収穫したときの満足感・達成感を得られる。

## 1 - (5) まとめ

表6-1 学生のこれまでの「栽培経験は何らかの効果があったか」では、「育てる」という単語の出現回数が一番多く32回であった。また、「知る」「植物」なども多くみることができた。学生の回答結果から、「栽培活動」と「育てる」という言葉には、異なる意味とアプローチの存在が考えられる。「栽培活動」と「育てる」という言葉は、植物の生長や生育に関連して使用される類似語である。しかしながら、「栽培活動」は、土壌を準備し、適切な環境条件を提供することからはじまる。種まき・水やり・草取り・害虫駆除などが含まれ、植物の適切な生長環境を提供する。つまり、科学的な手法や効率的な作業という部分が大きい。一方、「育てる」という言葉は表6-2が示すように、より個別のアプローチや注意を必要とする場合に使用されていることがうかがわれた。「育てる」という行為は、植物の生長に対してのより深い関与を意味していた。

学生の記述から示すように、植物を「育てる」ことで、自然とのつながりを感じ、成長や変化を通じて生命のサイクルや営みについて学ぶことができていた。また、植物を育てることは忍耐や努力が必要な場合もあり、時間がかかることを知ることができていた。さらに、予期しない問題や困難に直面することもあるが、その過程で自己成長を学び得たという思いをもつことができていた。

ここであえて表6の回答で「わからなかった」と回答した49名の自由記述を取り上げる。「ただ楽しかっただけ」「言われてやったので何にも感じなかった」「収穫して楽しい、それだけ」という回答が多くを占めていた。比較して考えると、周りの教師や大人の行為や言葉かけの違いが顕著にあらわれていたことがうかがえた。

表7-1「幼児にとって「栽培活動」は何らかの効果があるか」では、「自然」という単語の出現回数が一番多く40回であった。続いて、「大切」「食べもの」なども多くみられた。やはり「栽培活動」では、種まき・水やり・草取り・害虫駆除など科学的な手法や効率的な作業を知ること・得ること・学ぶことを重視するのではなく「自然」に重点を置いていると考えられる。学ぶ立場から教える立場に視点を変えて思考しても「栽培活動」をつながりの手立てとして自然と子どもとのつながりを考えていこうとする姿勢は変わらないようだ。幼児が「栽培活動」を行い、植物を育てることは、自然の恵みや資源の大切さや自然の営みや生命のサイクルについて学べるという自由記述が多くみられた。このように、感覚や認知、情緒の発達に貢献するという考え方が多くうかがえる。

なお、表6の回答で自分自身への効果について「わからなかった」と回答した49名中36名は、表7「幼児にとって「栽培活動」は何らかの効果があるか」では、「効果がある」と回答した。13名は「幼児にとって「栽培活動」は何らかの効果があるか」でも「わからない」と回答し、その「理由」として、「子どもに効果を教えられない」や「子どもの感じ方が、それぞれ違うから効果を引き出せない」「5歳児だったら大切さや普段食べているものに興味があると思うが、それ以下の年齢だったら、わからないと思うからです」という自由記述が述べられていた。ここでも、学生が経験した「栽培活動」のなかで、教師や大人の行為や言葉かけの違いが顕著にあらわれていたことがうかがえた。そこでつぎに【分析2】においてa幼稚園に勤務する保育者における「栽培活動」の実態と意識について検討する。

## 2 【分析2】保育者の「栽培活動」意識調査（質的研究）

表8 インタビュー調査協力者

- ・インタビューの協力者は5名である。協力者の一覧は表8に示す。
- ・データ収集方法については、インタビュー中のメモや記憶から口頭データの収集を行った。インタビューは協力者の許可を得てメモや記憶をした。個人面接により調査者と回答者が1対1で対面して聴取をおこなった。調査時期は2023年8月10日。調査は1名につき約30分。
- ・インタビューは、次の質問項目に基づき、半構造化面接法で行われた。

	勤務年数
A	30年
B	19年
C	8年
D	4年
E	2年

- (1)畑の土起こしについて。(2)苗(種)の種類設定について。(3)保育者養成校での「栽培活動」の学習の存在。
- (4)園の「栽培活動」を通して自分自身に効果があったこと。(5)園児にとって「栽培活動」は何らかの効果がみえたか。(6)園で気軽に「栽培活動」ができるとしたら、どんな支援があればよいと思うか。質問項目を中心にインタビューの回答を示した。まず、報告すべき内容をまとめ、次いで具体的な回答を記す。筆者の捕捉が必要な場合は[ ], 筆者の強調は , 省略…、を記す。

### 2- (1) 畑の土起こしについてのインタビュー

「畑の土起こし」に該当するインタビュー回答を表9に示した。土起こしの時期は、入園式などの園行事と重なる。表9から「職員などと一緒にやることで…」「保育職以外の職員と連携をとりながら…」など、全員が「勤務時間をどのように活用すれば、よりよい保育の提供ができるのか」という課題を抱えている。保育職以外の職員が畑の下準備や整備をしていることを有効と捉え、重視していることもうかがえる。また、畑の下準備や整備などに要する労力については、経験年数が増すに従い「不安感」から「困ったらみんなでやればなんとかなる」という心の段階に移行していくこともうかがえた。チーム保育である。

表9 畑の土起こしについて

A	一人で土起こしをすることになれば行うことはできます。ただし、同僚や職員などと一緒にできればありがたいし、一緒にやる <u>ことが園にとって大切なことです</u> 。〔土起こしの時期は、入園式などの行事が多いのですが〕みんなですり合わせて、やってみよう。大丈夫。〔勤務〕時間をどう使うかという問題で〔土起こし〕は、可能です。
B	…一人で土起こしをするのは…大変だなぁと思う。しかし、作物を育てることは保育にとって大切である…人の手〔保育者以外の職員〕を借りてやるにしても、保育者が土の作り方…土の起こし方などを調べて一度でもやってみる方がよいか。…学年が上の園児なら…一緒にやってみるのも…。本園では、〔土起こしの時期〕保育の時間を割かないといけない…部分があるので…〇〇さん〔 <u>保育職以外の職員</u> 〕 <small>以下省略</small> と連携を取りながら…〇〇さんが気づいて…協力しながらやっている。いつか〔上の学年の園児〕一緒にやってみるとよくなって…思う。
C	保育をしながら〔土起こしのこと〕は大変なのかなって思う面があります。専門的…「栽培活動」がわかる人と一緒にできることがよい…でも保育の〔他に使いたい〕時間を考えると…時間を割かないといけないので大変かな。でも、勉強していきたいと思います。〇〇さんがいるので（土起こしなどしてくれる）大変にありがたいです。安心して保育ができます。
D	…土起こしなど…一人では、やり方も全くわからないし、とうてい無理です。〇〇さんがいるので…やってくれるので、ありがたいと思ひ安心していられます。
E	祖父母が畑をしていて、幼い頃から一緒に（農業）をやっているの、「土起こしから〔栽培活動〕をやって」という話があったら、 <u>できる！という自信</u> はあります。しかし、 <u>保育</u> ということを考えると、どのように時間を調節していいのかわかり不安を感じます。〇〇さんがいるので安心しています。できれば、園では、この作業をやってくれる人が居れば大変に嬉しい。ありがたい。

## 2- (2) 苗（種）の種類設定についてのインタビュー

「苗（種）の種類設定」に該当するインタビュー回答を表10に示した。一番大切にしているのは「子どもの意見」であるが、その裏では教員間で綿密な教育効果が話し合われていたことがうかがえる。単に植物を育てるのではない。「上の学年からのプレゼント」「給食にいれてもらう」などが述べられているように育った植物をどのようにするのか。命の最後までを視野にいれていることもうかがわれた。ちなみに、こうした教員の意図的な計画が表6にあらわれている。（幼少期に経験した「栽培活動」では、命や自然、生長過程を知るなどの効果を得たという学生が144名中90名）

表10 苗（種）の種類設定について

A	苗（種）は、年間行事計画の中から教育的效果を考えながら、あらかじめ職員間で話し合っ決めていきます。
B	年間行事計画のなかで、取り入れて活動できるような作物を選んでいる。…①育てやすさを…保育のあいまに育てられる…生長の意図もつたえられるもの。②子どもには…上の学年の育てているもの…上の学年が育てているものを常にみられるようにしながら…。③なかには、子どもがもってくるものも畑に…今年はヒマワリを育てることになった。
C	はじめに〔なにを育てたいか〕子どもに聞いて選んでいくが… <u>年長の〔育てた植物〕をみているので、毎年同じように、とまと・きゅうり・じゃがいもという声</u> がでます。年長では…という気もちもあるのかな。一緒に苗を買いに行つて自分の選んだ苗ということ〔気もち〕を大切にしています。
D	今、子どもが育てているのは子どもが持ってきたヒマワリ。 <u>上の学年からプレゼントされた〔アサガオの種〕のアサガオ</u> 。
E	子どもの意見をそのまま、すべて受け入れても可能でないものもあります。まず、 <u>保育者間で話し合っ</u> て、先輩の経験から知ります。 <u>教育的価値</u> も考えます。〔たとえば、どんな〕①スーパーなど子どもが身近なところで目にできる野菜や花。…話題が広がる。②その日採れた野菜が〔容易に〕給食に入れてもらえそうなもの。③野菜スタンプなど食べるだけでなく教材になるもの。

## 2- (3) 保育者養成校での「栽培活動」の学習の存在についてのインタビュー

「保育者養成学校で「栽培活動」について習っておいた方がよいか」に該当するインタビュー回答を表11に示した。栽培知識は、教員間がお互いに指導計画を話し合うときの基礎で、教員同士の相互理解を図られたり年間行事計画や学級経営の礎になったりしていることがうかがえる。したがって、学習内容では「どの植物をどの時期に植えるのか」など、時季に関すること等が述べられており、「栽培活動」が教育的効果を生むためのカリキュラムを吟味する場面で、チームとして若手も話し合いに参加できるような基礎概念があった方がよいのではないかという考え方がうかがえた。つまり、a幼稚園では積極的に若手を話し合いに参加させるためのチームを意識した回答が主であることがうかがえる。

表11 保育者養成学校で栽培活動について習っておいた方がよいか

A	…（笑）あればあったでよい。みんなで話し合っやっていけば知識はひろがる。…養成校でたくさんの〔栽培〕知識をもって卒業しなくても、園に畑があれば必然的におこなっていくんですよ。また、子どもがかわいいから、子どものために…と学ぶので、〔経験を積むうちに〕知識がついていくのですよ。〔若い頃〕周りの先輩に聞くことで〔人間関係が〕つながりました。…しかし養成校で、自分で育てるという経験があれば、〔栽培活動で〕気に留める点や子どもへの声かけのポイントがわかるので…働いてから、畑についての話し合いができやすいし、保育にいかせやすいよ。
B	養成校で取り立てて、ものすごい知識をもってくる必要はないと思う。他に保育について学ぶこともたくさんあるし…。保育園で働くようになれば、だんだん覚えていくと思う。ただあえて考えれば、 <u>どの植物をどの時期に植えるのがよいか</u> 。旬を知っていること。…今、いつでも野菜がスーパーにあるから…学生自身も知らない子もいるようだ。日当たりのこと…。学生自身が季節を感じる <u>ことが大切だ</u> ……
C	…わたしは、自然保育のことをもっと学んで置いた方がよかったとおもった。…… <u>育てやすい野菜</u> をいくつか知っておくと話合うときに困らない…。育てやすい野菜とその育て方…。育てやすい野菜の注意点くらい知っていたらよい……。
D	はい。 <u>種を蒔く時期</u> 。野菜の花の色のくらの予備知識は、知識としてわかっていてよかった方がよい。
E	よいです。祖父母と共に幼いころから農業はしているのでわかってるが…。「栽培活動」のことは知っておいたほうがよいです。〔具体的には〕野菜に関しての身近な知識です。苗を植える時期。野菜の花の色。花が咲いてから実がなること。オクラやナスなどにどうしてトゲがあるのか。こうした疑問をまずもって、みんなで調べたらよいと思います。

## 2 - (4) 園の「栽培活動」を通して自分自身に効果があったことについてのインタビュー

「自分自身に園の「栽培活動」を通して、何らかの効果がありましたか」に該当するインタビュー回答を表 12 に示した。「栽培活動」を共有することで、保育者と子ども、保育者と保育者が自然と会話をするようになり、関係がつくられていくことがわかった。それぞれが互いに発見したことを報告しあうことで、共感し合い支え合える関係へと発展していけることがうかがえる。回答者 A の「植物は保育者にとっても予測不可能な場面をみせる…」は、興味深い意見である。

表 12 自分自身に園の栽培活動を通して、何らかの効果がありましたか

A	栽培は連続しているので、次の楽しさを自分自身が味わえる。子どもと共感する内容が他の教材〔絵本や積み木などの玩具〕と違う。植物が保育者にとっても予想不可能な場面を見せるから…。
B	自分自身が食べるものへの愛着がわく。そまづにしないように…。食べものや利用の仕方がないか…高めていこうとする。
C	…子どもが気づきを伝えてくる姿がうれしくて、かわいくて、…共に喜ぶ自分がある。自分自身も〔生長の変化〕気づいた時に喜んでいる。
D	子どもの発見に自分が、自分のことのように喜んでいることに気づいて、また喜んでいる。アサガオのことで…「朝の〔花〕の色」と「帰りの〔花〕の色」が違うのはなぜかと聞かれて、そのことを調べて子どもにおおしたとき（伝えた）に嬉しかったです。子どもと共に育っている喜びを味わえています。
E	…知識が増えています。〔具体的に〕①キュウリは水をあげすぎると曲がってしまう。②緑のトマトもあるよ。③収穫のタイミング（行事との兼ね合い）。…でも、それ以外に先輩たちとのコミュニケーションが楽しいです。…保育のことや子どものことではなく…。野菜が枯れて困ったことなどを相談すると…先輩たちと集まって相談したり話し合ったりするから…コミュニケーション能力が高まっている感じがします。

## 2 - (5) 園児にとって「栽培活動」は何らかの効果がみえたかのインタビュー

「園児にとって「栽培活動」は、何らかの効果がありましたか」に該当するインタビュー回答を表 13 に示した。「栽培活動」そのものが効果をあらわすのではなく、そこから発生するさまざまな人・もの・ことと子どもを「栽培活動」がつかないで子どもの成長・発達を促進していることがわかる。

表 13 園児にとって栽培活動は、何らかの効果がありましたか

A	…食べることに楽しさ。土から出てきたものをみつける喜び。家では個人だけれど、みんなで作ることのちから。
B	…食べられるようになる。生長を追って発見していける。…身の周りの少しの変化に気づけるようになった。
C	…土ってなに。土のなかに何があるの。土の外に野菜ができるの。…興味関心をもつ力。知ろうとする姿。
D	「水をあげてもよい」と聞いてきた。…好きなようにしたり、ほっておいたりしても育つものではないと気づいてきている。
E	0 歳児…。小さいなりに「畑で採れた野菜だよ」と言うとか苦手な野菜も口にしたり、さわってから食べたり興味をもっている。

## 2 - (6) 園で気軽に「栽培活動」ができるとしたら、についてのインタビュー

「園で気軽に「栽培活動」ができるために支援があるとすれば」に該当するインタビュー回答を表 14 に示した。「栽培活動」は、保育時間内に子どもと共にあって、はじめてその価値を有するのだろう。しかしながら、保育は「栽培活動」だけでは成り立たない。また、「栽培活動」というのは。自然は。我々の思うようには動いてくれない。そう考えたとき、畑の整備などを手伝ってくれる者がいることは有効であることがわかる。ちなみに、回答者全員が、支援より先に「まず、子どもとできることは何か」を最優先に考えていた。このことは、保育者が安易に人に頼ろうとしているわけではないことがわかる。「栽培活動」の教育的効果に重点を置いていこうと考える。

表 14 園で気軽に栽培活動ができるための支援は

A	うーん、支援というか。人の手があれば…。それはそれでありがたい。うーん、絶対にありがたい。うーん支援かあ…。でもね。…園に畑があれば、子どもの教育として何かできないか。そう思って学んでいく…保育士ってそういうものです。(笑)
B	みんなでやろう！という気持ちがあることです。…もし園の年間行事で（畑が）メインになったなら、みんなで、畑で育てることの意義を話し合っ、特異な人が苦手な人のフォローしてやっていく。自分たちでやってみてよかったと思えないと…「栽培活動」をメインにするのは…。通常に活動していくのでも、みんなで話し合う…育てやすいもの、プランターの提案など。
C	水や草などは子どもとできるお世話。土起こしや後片付けなどは支援があるとありがたい。育てるのには、〔他の教材と違って〕時間をおって適切な時期を見てくれる〔栽培がわかる〕人がいると…支援があるとありがたい。
D	畑以外の活動もあり、それぞれの時間を生かして〔よりよい保育を展開していく〕いくためにも支援の手があったらよい。どんな支援なのかというと…（具体的にはでない）。保育の中で「栽培活動」がおこなって行かれるような支援があるとよい。
E	0 歳児…。畑の草むしりはできなくても、石ひろいはできるかな。目を離すことはできないので…。もちろん一緒に畑の整備をしますが、それでも、土起こしや畝、畑を片づけてくれるなどの人がいると、大変にうれしいです。

## 3. 【分析 3】栽培活動をしている学生の意識調査（振り返りレポート）

対象とするのは、a 短期大学のゼミナール活動で「栽培活動」をしている学生である。「栽培活動」は、a

短期大学敷地近隣にある小規模の畑で行っている。畑には自由に徒歩で行き来できる。

ゼミナール活動では「自然活動」を取り上げ、その中での「栽培活動」をメインとしてきた。ゼミナール活動は、学生の希望を反映しつつ人数調整に基づく配分によって決定されるが、少なくとも自然や「栽培活動」に関心を持つ学生の集まりである。

【分析1】では、一般的な学生の実態と意識を確認した。【分析2】では、保育者の実態と意識を確認した。【分析3】では、保育者養成学校で「栽培活動」を実践した学生はどのように考えているのだろうかということを確認する。

以下では、a 短期大学のゼミナール活動での「栽培活動」をめぐる実践について学生を紹介する。学生がこれまでに「栽培活動」を経験している機会は様々であり、畑作業の時点でその様相は多様に富む。まずは、畑作業をめぐる実践に対する学生の積極的な意味付けを紹介する。その後、「栽培活動」の実践の意義が認められる一方で、学生の葛藤や不安を抱えていることにも関心をむけたい。さらに、実践を行う際の懸念も指摘しながら、それらを検討する。

まずは、ゼミナールの2年生が、畝づくりやマルチなどの畑の整備をした事例 図-7 から、活動後の振り返り記述を分析し、「栽培活動」と保育資格取得とのかかわりをどのように捉えているかを挙げる。全員から実践に対する好意的な声が聞かれた。その中でも、特に、労力や暑さなどが大変であるという気持ちをもちつつも、喜びや楽しさへの気づきがあった。例えば、はじめて作業をした学生の場合、農業学校でもないのに、どうしてこんな作業をするのかと思いつつも、コミュニケーションの高まりや新しい発想の機会となっていると捉えている。例えば、1年生の時との活動の違い（畝の有無）に戸惑いながらも、土づくりから行うことは貴重な機会であると捉えている。また、みんなで作業することで、畑の整備が楽しさや喜びにかわるという意見も強調された。【分析2】によって幼稚園の現場においても、畑作業は職員間の協同の承認が生まれると評価していた。



図-7 畑の整備の様子（写真）

平らな土から盛り上げて、マルチをはる作業をしました。力がないとキツくて、子どもとやる時には、マルチを先に敷いておいてあげるとよいと思いました。しかし、親子でする作業にして保護者を呼ぶのもよいかなどとも思いました。今日の活動は、農業系の学校じゃないけれど、農業をすることによって、虫が出てきたから暖かくなってきたのだとか季節についてわかるし、自然との関わりになるからよいと思った。キツかったけれど、皆で協力することによってコミュニケーションがとれた。【2023 年 4 月 13 日 学生 A】

今日、畑で畝をつくりました。今年は1から畑づくりです。畝づくりをしました。深く耕すことや、マルチはピンと敷くことが大切だと初めて知りました。保育の中で、畑づくりをする時に、子どもに教えてあげられると思いました。

畑をつくることで子どもたちは土の感触を楽しんだり、道具の使い方や、虫が出てきて「きゃー」と楽しみ驚いたり体全体を使って自然を学べると思いました。

暑かったです。暑い中で大変でした。が、やることに意味はあると思いました。

【2023 年 4 月 13 日 学生 B】

はじめて畑を耕す作業を行いました。去年は（1年生時）植えるだけだったので耕す作業の大変さを知りました。はじめは、耕す作業に慣れず、まっすぐ掘れなかったけれど、やっていくうちに楽しくなってきた良い経験になったと思いました。これから種や苗を植えるのが楽しみです。

耕す過程から行うことで愛着が沸き、子どもたちにも良い経験になると感じました。耕すのは危険なので耕している様子を見せるのも良いと思います。【2023 年 4 月 13 日 学生 C】

今日は、みんなで畑を耕す作業を行いました。1人が全て行うのではなく、作業をしている人を見て交代で協力することが大切でした。保育者は“代わってあげて”“大変そうだよ”などの声をかける必要があると思いました。自分はマルチを主にしました。マルチを先頭で支える人は、曲がっていたら伝えたり、クワで作業している人にも意識したりしながらケガなく安全にする必要があると思いました。次回は、附属幼稚園交流に向けてグループで協力して、よき保育者になれるように見通しをもっていきたいです。【2023 年 4 月 13 日 学生 D】

今回のゼミナール活動では、畝づくりをしてみて私は初めての体験でした。難しくて最初は苦戦しました。ですが段々と進めていくうちに慣れて楽しく畝づくりができました。

私が土を耕している時に周りでみていた友だちが「クワを上にあげすぎじゃない？」などとアドバイスをくれて、それが私が上達したきっかけに繋がっていて、すごくありがたかったです。

他の人が気軽に発した言葉が自分や誰かのためになると考えると、日常の何気ない一言のありがたみを改めて感じました。【2023 年 4 月 13 日 学生 E】

別の観点からも「栽培活動」と保育資格取得とのかかわりをどのように捉えているかを挙げる。苗（種）を植えたあと、生長をおってきた学生は、花は咲いても実を結ばないスイカの受粉を体験する。受粉の体験をしながらも、これまでの活動を振り返って、細かい作業があることに気がつく学生 F。

今日は、スイカの受粉とわき芽かきを行いました。以前見た時よりも、ものすごく生長していたので植物の生長は早いと改めて感じました。

今までスイカを育てたことがなくて、受粉させることを知りませんでした。植物を育てるのは雑草やわき芽をとったり、細かい作業が大切なのだと、受粉作業をしながら改めて思いました。

【2023 年 7 月 13 日 学生 F】

受粉を体験することによって、花は咲いても実が結ばない不安が解消され喜びを表現する学生 G。自分自身の喜びと発見を保育現場で伝える方法を具体的に想起している。また、「トマトやキュウリなどの野菜は手間がかからない。観察しやすい。」ということに気づいた。この点が、本分析で重要になってくる。こういう知識があつてこそ、現場に出て「栽培活動」を計画するときに役立つのではなかろうか。対話ができるのである。チーム保育という時、若手ではあるが意思をもって話し合いに参加できる手立てとなる。そういう経験こそが重要なこととなりそうである。

今日は、スイカの生長をみました。前回はスイカの受粉作業、わき芽とりをしました。前回の受粉のおかげで、小さな実が4~5個できていました。

これを保育士として教えるのならば「この前、めしべっていうのと。おしべっていうのを覚えている」と見せて「この2つをチュッチュってさせたよね」「そうしたら、何ができたかな？」と、スイカの小さな実を指さして見せて「そうだね。スイカできたね」「これを受粉って言うのだよ！」と伝えたいです。

自分たちで受粉させてスイカをつくれて、成長をみられて嬉しかったです。

スイカだけでなく、トマトやキュウリも実っていました。スイカより、トマトやキュウリは育てやすいのだなと思いました。【2023 年 7 月 19 日 学生 G】

## Ⅶ. 考察

以上にみたように、「栽培活動」は、学生が受けてきた教育活動としての「栽培活動」と密接な関係があった。学生たちが保育において「栽培活動」に期待する点は、第一に生命はおなじであるということを知らせる機会であること、第二に、作られたオモチャとは違う自然の不思議さや面白さを伝えられること、第三に、季節を対象として、植物を吟味して選ぶこと、第四に、観察に優れた植物によって、食育が可能になること、

の4点である。

こうした「栽培活動」を実践する方法として、【分析2】からもわかる通り、就職してから先輩に聞く、養成校で勉強する、自分で植物を育ててみるということが有効であり、そのどれもがまずは自分自身が「栽培活動」に接してみることである。それが必要な「理由」としては、栽培活動には、【分析1】からもわかる通り、保育者の観察眼が必要であるからだ。その点で注目すべきことは、どの調査対象者も保育における栽培活動が、科学的な栽培手法や効率的な農作業を教育することではなく、植物を育てることでの感覚・認知、情緒の発達の深い関係を主張していることである。「栽培活動」は、観察や実践によって子どもに知識を押しつけるものではなく、保育者のあたたかな眼差しのもとで、植物や土などの自然と自由に触れ合うことが大切だと考えていた。つまり、保育者の観察眼が必要なのであり、それを鍛えるためにも、まずは自分自身が「栽培活動」に接してみることである。

さらに、教育活動に即して「栽培活動」をみたとき、「栽培活動」には大変さと喜びの両方があることがわかった。調査結果から「栽培活動」が大変だから嫌だという意見より、大変だから有難みがわかったという意見が多い。つまり「栽培活動」は、両者を区別してはならない。【分析1】の「栽培活動」の経験調査では、土起こしや草取り作業の頻度が少なかった。これらの作業は、「ただ疲れるだけ」「単に大変だ」という印象を受けやすい。しかしながら、保育者の行為や声かけで左右されることも確かである。【分析3】からもわかるように、クワで土を起こす時に声をかけあったり、虫を見つけたり、ただの作業とならないような保育者の行為や声かけが理想とされる。ただし、実際の「栽培活動」は、予測不可能な場面が大多数であり、「栽培活動」だけに保育時間を割くことは難しいのである。したがって、厳密に考えすぎずにおおらかに活動することが良い。また、「栽培活動」が苗（種）植えや収穫に集中しても、活動の本質が、科学的な栽培手法や効率的な作業を教育することではなく、植物を育てることでの自己の感覚・認知、情緒といった発達を促すことが求められていけばよいのではなからうか。同時に、そう考えると「栽培活動」は、保育者のみが行うものではなく、時には専門家や保育職以外の職員の力も借りて、子どもが自由に多くを発見できる畑の整備や管理が必要だと考える。

#### －「栽培活動」の意義－

「栽培活動」が初めて幼児教育に登場したのは、明治期のフレーベル主義に基づく保育展開であった。とくに関信三が明治11年に「幼稚園創立法」<sup>8)</sup>においての「園庭の景況」において述べたことである。この論攷では、「幼稚園をつくるには園庭をつくるが必要だが装飾された庭ではなく、フレーベルが言う天（神）の造った植物等を見たり触れたりすることが、つまり実体験を通して感じる教育が大切である」と論じている。フレーベル主義の「庭造り」は、多様な作物や草花を栽培することから、それぞれに異なっているがある一つの法則性のもとに発芽し生育していくという「対立する同一」を教授していたといえる。また、一人であるいはみんなで作業を行い、収穫の喜びを分かち合えることも、植物栽培における特色である。<sup>14)</sup> というものである。これ以降、「栽培活動」という直接的な表現はないものの、幼児教育の内容として注目されるようになり、子どもの発達への必要性を訴え続けている。

#### おわりに

本稿では、幼児保育学科の学生が保育者としての学びを拡充する際に、「栽培活動」は学生の意識のなかで如何に存在しているのかを追求し、その答えを見いだすなかで保育者が適切な「栽培活動」を子どもに準備構成していくためのプロセスを解明しようと試みた。学生の意識は、「栽培活動」というよりは「植物を育てる」「自然に触れる」と捉え、その生長に寄り添い観察するための教育実践を、効率的かつ単純的に展開する方途として「栽培活動」の必要性を認識していた。そのため、自然は大切であり素晴らしい存在であるが、時間を割いてまで「栽培活動」をする理由を見つけれない。

「栽培活動」は以下の3点が指摘できる。1つ目は、学生も保育者も、現在「栽培活動」をしている学生も、どの立場であっても「栽培活動」をすることで自然とつながることを重視していることである。表7の単語の出現頻度においても「自然」という単語が上位にあり、「命の大切さ」「食べものの有難さ」などは、「栽培活動」を通して自然とつながることで、より豊かに育つと考えられていることがわかった。

2つ目は、幼少期の「栽培活動」の経験・体験が、その後の感情表現との関わりに深く影響していることである。表6の単語の出現頻度においても「育てる」「植物」という単語が上位にあり、植物を育てるなかで生じる感情「喜び」「感謝」「くやしき」「あきらめ」などは、「栽培活動」を通して自分の心とつながることで、より豊かな感情表現が育つと考えられていることがわかった。幼稚園教諭へのインタビューや「栽培

活動」をしている学生のレポートからも、見て取ることができる。自然は私たち人間が、どうすることもできない力をもっている。幼児がどんなに従順でも傲慢でも、自然がそれに応えることは少ない。だからこそ、本物の我慢や歓喜の感情表現、規範意識が芽生えるのだと考えられる。

3 つ目は、「栽培活動」は、絶えず変化する実践であるということ。保育環境は、「栽培活動」ばかりではない。絵本も音楽なども子どもにとって欠かせない活動である。絶えず変化する畑に対応することは時間をどのように使うのかという「不安」にもつながる。保育者が時間を有意義に活用するには支援者や協力者の存在がかかせない。例えば、a 短期大学のゼミナール活動で栽培活動をしているが、教育実習や長期休業においては、畑をみることができない。教員一人では大変な労力である。幸い、畑の下準備や整備を支援してくれる職員がいる。そのことが「栽培活動」を可能にしている。こうした支援の手は有効と捉え、重視していく必要があるだろう。

「栽培活動」は、保育に必要であり、その人のその後の人生を豊かにするという潜在意識があることが明確になった。今後は、「栽培活動」をしている子どもの意識や実態に注目する必要がある。このことを解明することにより、今回調査した学生や幼稚園教諭が重視している「植物を育てることでの感覚・認知、情緒の発達」の実際がみえてくることだろう。つまり、子どもの姿を知ることにより、保育養成校での「栽培活動」の在り方や、よりよきカリキュラム方法が見えてくるのではないかということだ。今後の課題として「栽培活動」は、子どもの心をどのように促進しているのかを明らかにしたいと考えている。

## 謝辞

本研究調査にご協力頂きました学生の皆様、a 幼稚園の皆様、ご指導賜りました教員の皆様に、こころより感謝と御礼を申し上げます。

この研究調査に利益相反はありません。

## 【引用文献】

- 1) 幼稚園教育要領解説(2019), 第3節 環境の構成と保育の展開 文部科学省平成30年2月 P246
- 2) 幼稚園教育要領(2018) 文部科学省 平成29年
- 3) 農林水産省, 食育基本法, <http://www.maff.go.jp/j/syokuiku/attach/pdf/kannrennhou-20.pdf>
- 4) 近藤幹生, 子どもと社会の未来を拓くー保育内容環境ー pp120-121 青踏社(2022)
- 5) 富永美香, 地下まゆみ, 井上美智子 環境教育の観点から見た保育における「栽培活動」と食育の連携に関する研究(Ⅱ) 大阪大谷大学教育学部
- 6) 吉田直樹, 安倍富士男(2020) 保育構造論において飼育・栽培活動が持つ教育的意義, 社会問題研究, (69), PP45-56,
- 7) 浅見均, 明治期における宣教師 A.L ハウの保育実践についてー保育への自然導入についての一考案ー
- 8) 日本幼児教育史第1巻, p 110
- 9) 三十年の歩み 学校法人松本学園 松本短大幼稚園 p 109
- 10) 平尾健二(2022) 幼児教育に用いる栽培植物に必要な生育特性について 福岡教育大学紀要
- 11) 鈴木里美, (2022) 小麦「栽培活動」を通して学ぶ自然と共生した食農保育の実践 岐阜女子大学
- 12) 地下まゆみ, 井上美智子(2023) 環境教育を実践できる保育者養成のあり方-ビオトープ造成を通じた教育効果- 大阪大谷大学教育学部
- 13) 八幡美保, 吉見昌弘, 清水陽子(2023) 保育者養成における「栽培活動」の在り方の検討 名古屋短期大学
- 14) 青木美智子, (2017) フレーベルの「庭造り」(Gartenpflege) から見る幼児期における栽培の意味 京都橘大学研究紀要
- 15) 新時代の保育双書 保育内容 環境 第3版 秋田喜代美他 (株) みらい(2021)pp95-99

## 【参考文献】

- ・近藤敏夫, インタビュー調査の技法-現象学的社会学の具体的応用- 佛大社会学第34号(2009)
- ・寺下貴美, 第7回 質的研究方法論~質的データを科学的に分析するために~ 北海道大学大学院教育講座
- ・櫃本真美代(2016) 保育者養成校における栽培活動の教育的意義について-環境教育の視点から- 佐女短研究紀要
- ・ヒフィザヌール(2012), 生活科・自然と遊び単元の視点にしたインドネシア幼児教育のカリキュラムの開発-幼稚園の歴史と現状と課題に関する基礎的研究- 愛知教育大学大学院 教育学研究科

- ・近藤千草，葉山登，箕輪潤子，菅井洋子，草信和世，内海崎貴子(2012) 保育者養成における「ひと・もの・こと」に出会う体験型学習プログラムに関する実証的研究(4) 川村学園女子大学研究紀要 第23巻 第2号 41-65項
- ・勝川謙三，松山信彦(2021) 領域「環境」における栽培活動の実践と行動観察 弘前大学教育学部紀要 第126号
- ・野崎健太郎(2023) 保育者および小学教師のためのジャガイモの栽培手順 椋山女学園大学教育学部紀要 16(1)
- ・平田豊誠(2022) 佛教大学附属幼稚園でのサトウキビ栽培の実践可能性の検討 佛教大学教育学部学会 紀要第22号
- ・松山孝博，廣田美紀，井上美智子 持続可能な社会に向けて幼児における「子どもの参画」を考える - 環境学習に取り組むこども園の事例から - 大阪大谷大学

#### 【参考図書】

- ・永野重史，進野智子(2006)：幼児が夢中になるとき…… 北大路書房
- ・大豆生田啓友，渡辺英則，森上史郎(2012)：保育方法・指導法 ミネルヴァ書房
- ・秋田喜代美，三宅茂夫(2021)：子どもの姿からはじめる領域・環境 (株) みらい
- ・秋田喜代美，増田時枝，安見克夫，箕輪潤子(2021)：新時代の保育双書 保育内容環境第3版 (株) みらい
- ・田中亨胤，三宅茂夫(2021)：教育・保育カリキュラム論 (株) みらい